

## 「そんな者ではない」

ヨハネの福音書 18:10～27

### はじめに

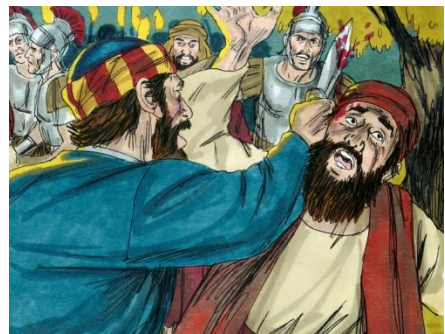
十字架にかかれる前夜、イエシュアは弟子たちを連れて、エルサレムの東にあるケデロン川の川筋を渡った所にある園へと向かわれました。そこはイエシュアと弟子たちの会合の場であり、三年半という短い活動期間にあってもたびたび訪れた憩いの場、交わりの場所でした。そんな特別な場所に、裏切る者イスカリオテ・ユダがやって来ました。兵隊を率い、その手に武器を持ち、もはや弟子としてではなく、イエシュアと弟子たちの敵として、ユダはやって来たのでした。そしてイエシュアが捕えられるその時、一人の弟子が行動を起こしました。

### 1. シモン

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

18:10 シモン・ペテロは、剣を持っていたが、それを抜き、大祭司のしもべを撃ち、右の耳を切り落とした。そのしもべの名はマルコスであった。



弟子のシモン・ペテロは、持っていた剣で大祭司のしもべである、マルコスという名の男に撃ちかかり、その右の耳を切り落としたとあります。この出来事は、イエシュアを守ろうとしたペテロの命がけの行動として、またはイエシュアが十字架にかからなければならない理由が理解できていないペテロの軽率な行動として解釈されがちです。しかし前回の 18:4 で「イエスはご自分の身に起ころうとするすべての知っておられた」とあるので、このペテロの行動が無意味なもの、必要のないものであったならば、あらかじめ彼を戒め、剣を取り上げることもできたはずですが。しかしイエシュアはペテロが剣を持つことをお許しになりました。この箇所と同じ場面について記したルカの福音書 22:38 にこのような記述があります。

【新改訳改訂第3版】

ルカ

22:36 そこで言われた。「しかし、今は、財布のある者は財布を持ち、同じく袋を持ち、剣のない者は着物を売って剣を買いなさい。

22:37 あなたがたに言いますが、『彼は罪人たちの中に数えられた』と書いてあるこのことが、わたしに必ず実現するのです。わたしにかかわることは実現します。」

22:38 彼らは言った。「主よ。このとおり、ここに剣が二振りあります。」イエスは彼らに、「それで十分」と言われた。

22:39 それからイエスは出て、いつものようにオリーブ山に行かれ、弟子たちも従った。

明らかにイエシュアは剣の必要性を容認しておられます。もしこれが必要のない物、あるいは使ってはならない物であったならば、「剣を買いなさい」とは言われなかったはずで、つまりこの大祭司のしもべマルコスに剣で撃ちかかったペテロの行動は、たとえ彼の暴力性、あるいは軽率さが生んだ結果であったとしても、そこには、聖書に記されるべき何等かの意味があると考えられます。ただ彼がマルコスを殺すことはお許しにならず、右の耳だけを切らせるようにされました。前にも述べましたが、筆者ヨハネはこの福音書を、イエシュアについての膨大な情報を厳選して書き記しているのです。偶然、たまたま起こったことなどをわざわざ書くことなどあり得ません。つまりここに記されていることはすべて偶然ではなく必然であり、シモン・ペテロの剣によって大祭司のしもべマルコスの右の耳だけが切られたことには、何等かの意味があると考えられます。

まずこの出来事を起こしたシモン・ペテロについて考えてみたいと思います。なぜ彼だったのでしょうか。先ほどのルカ 22:38 によれば弟子たちが持っていた剣は二振りあったはずで、それなのになぜこのシモン・ペテロだけが剣を抜いたのでしょうか。創世記に 34 章にそのヒントがあると考えられます。

#### 【新改訳改訂第 3 版】

#### 創世記

34:1 レアがヤコブに産んだ娘ディナがその土地の娘たちを訪ねようとして出かけた。

34:2 すると、その土地の族長のヒビ人ハモルの子シェケムは彼女を見て、これを捕らえ、これと寝てはくしめた。

34:7 ヤコブの息子たちが、野から帰って来て、これを聞いた。人々は心を痛め、ひどく怒った。シェケムがヤコブの娘と寝て、イスラエルの中で恥ずべきことを行ったからである。このようなことは許せないことである。

34:8 ハモルは彼らに話して言った。「私の息子シェケムは心からあなたがたの娘を恋い慕っております。どうか彼女を息子の嫁にしてください。

34:9 私たちは互いに縁を結びましょう。あなたがたの娘を私たちのところにとつがせ、私たちの娘をあなたがたがめとってください。

34:13 ヤコブの息子たちは、シェケムとその父ハモルに答えるとき、シェケムが自分たちの妹ディナを汚したので、悪巧みをたくらんで、

34:14 彼らに言った。「割礼を受けていない者に、私たちの妹をやるような、そのようなことは、私たちにはできません。それは、私たちにとっては非難的ですから。

34:15 ただ次の条件であなたがたに同意しましょう。それは、あなたがたの男子がみな、割礼を受けて、私たちと同じようになることです。

34:24 その町の門に出入りする者はみな、ハモルとその子シェケムの言うことを聞き入れ、その町の門に出入りする者のすべての男子は割礼を受けた。

34:25 三日目になって、ちょうど彼らの傷が痛んでいるとき、ヤコブのふたりの息子、ディナの兄シメオンとレビとが、それぞれ剣を取って、難なくその町を襲い、すべての男子を殺した。

シモンは日本語の旧約聖書ではシメオンと表記されていますが、ヘブル語では同じ綴りです。この記述は、アブラハムの子イサクの子であるヤコブの家族と、カナンの地の先住民であったヒビ人ハモルの家との間に起こった「恥ずべき、許せない」事件についてのものですが、これに対してヤコブの次男シメオンとレビの行った報復「悪巧み」についての箇所、シメオンが剣を使ったことが記されています。もちろんイエシュアの弟子のシモンとこのヤコブの息子シメオンは同じ人物ではありませんが、暴力的で、軽率に剣を使った点においては共通しています。その結果、シメオンは父ヤコブからこのような呪いを受けるのです。

【新改訳改訂第3版】

創世記

49:5 シメオンとレビとは兄弟、彼らの剣は暴虐の道具。

49:6 わがたましいよ。彼らの仲間に加わるな。わが心よ。彼らのつどいに連なるな。彼らは怒りにまかせて人を殺し、ほしいままに牛の足の筋を切ったから。

49:7 のろわれよ。彼らの激しい怒りと、彼らののはなはだしい憤りとは。私は彼らをヤコブの中で分け、イスラエルの中に散らそう。

父ヤコブのこの呪いの預言により、シメオンとその子孫とは他の兄弟たちの子孫、すなわちイスラエルの12部族の中にあっても、特定の相続地を持たない「散らされた」民となっていきます。この事実がイエシュアの弟子であるシモンが剣を抜いたこととどのような繋がりがあるのかと言えば、今日のメッセージのタイトルにもあるように、この後シモン・ペテロがイエシュアの弟子であることを「そんな者ではない」と否定して、自らその関係を切ってしまう出来事が記されており、まさにシモンが「分け」られてしまうと表現できる箇所なのです。つまりシモンが軽率に剣を抜いたこの出来事は、この後すぐに起こるシモンにとって呪いとも言えるような出来事を暗示していると考えられます。実際にイエシュアは彼についてこう預言していました。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

13:37 ペテロはイエスに言った。「主よ。なぜ今はあなたについて行くことができないのですか。あなたのためにはいのちも捨てます。」

13:38 イエスは答えられた。「わたしのためにはいのちも捨てる、と言うのですか。まことに、まことに、あなたに告げます。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います。」

イエシュアのためなら「いのちも捨てます」と豪語したシモン・ペテロが、鶏が鳴くまでに、つまり朝が来ないうちに、この夜の間に三度もイエシュアを「知らない」と言う。彼の宣言は偽り、または軽率に語られたものだったのでしょうか。しかし彼は家も仕事も捨て、微塵も疑うことなくイエシュアについて行った人であり、弟子の中で真っ先に「あなたは生ける神の御子キリスト（メシア）です」（マタイ 16:16）と告白したほどの人物です。そしてイエシュアを捕えに来た 800 人近い兵隊を目の前にしても臆することなく剣を抜いたほどの男ですから、彼の言葉に偽りはなかったと考えるべきです。しかしこの後確かにシモン・ペテロは鶏が鳴くまでに三度もイエシュアとの関係を否定するのです。非常に理解し難い、本来ならばあり得ないような、ヤコ

ブが息子シメオンを呪ったような、まさに呪いでもかけられたかのようなシモン・ペテロについての出来事が暗示されているのがこのシモン・ペテロが剣を抜いたことが記されている理由だと考えられます。

## 2. 大祭司

では次にシモン・ペテロが剣で撃ちかかった、大祭司のしもべマルコスという人物について考えてみましょう。なぜシモンは 800 人近い敵の中で、彼だけに撃ちかかったのでしょうか。これも偶然ではなく必然と言える何かの意味があると考えべきです。まず彼は「大祭司のしもべ」であったということに注目してみましょう。マルコスはイエシュアを捕えるために大祭司から遣わされて来た、いわば大祭司の代理人です。彼の行動は彼自身からのものではなく、後述しますこの時の大祭司カヤパからのものなのです。つまりマルコスに剣を向けることは、大祭司カヤパに剣を向けたことと同じであり、シモン・ペテロが剣で切ったのはマルコスの右耳であると同時に、彼の主人である大祭司カヤパの右耳であったと解釈することができます。ちなみに岩波訳聖書ではこの右の耳を「右の耳たぶ」とも訳せるとしています。このように解釈するならば、大祭司の右耳、または耳たぶに関する以下の御言葉との関連性が考えられます。

### 【新改訳改訂第3版】

#### 出エジプト記

29:1 あなたは、彼らを祭司としてわたしに仕えるように聖別するため、次のことを彼らにしなければならぬ。すなわち、若い雄牛一頭、傷のない雄羊二頭を取れ。

29:2 種を入れないパンと、油を混ぜた種を入れない輪型のパンと、油を塗った種を入れないせんべいとを取れ。これらは最良の小麦粉で作らなければならない。

29:3 これらを一つのかごに入れ、そのかごといっしょに、あの一頭の雄牛と二頭の雄羊とをささげよ。

29:19 あなたはもう一頭の雄羊を取り、アロンとその子らはその雄羊の頭に手を置く。

29:20 あなたはその雄羊をほふり、その血を取って、アロンの右の耳たぶと、その子らの右の耳たぶ、また、彼らの右手の親指と、右足の親指につけ、その血を祭壇の回りに注ぎかける。

29:21 あなたが、祭壇の上にある血とそそぎの油を取って、アロンとその装束、および、彼とともにいる彼の子らとその装束とに振りかけると、彼とその装束、および、彼とともにいる彼の子らとその装束とは聖なるものとなる。

これは大祭司の任職、聖別の際に行うべきことを記したのですが、その際にアロン、すなわち大祭司となる者の右の耳たぶに血をつけることが定められています。つまり右の耳に血を塗られた大祭司は、聖なる者すなわち神様に受け入れられる者という証しであり、大祭司としての務めに携わることが神様によって認められるのです。シモン・ペテロの剣によって右の耳を切られたマルコスは大祭司から遣わされたしもべであり、大祭司の代理人であると述べました。マルコスの右の耳は切られ、その耳は当然血に染まったことでしょう。それはすなわち彼の主人である大祭司カヤパの右の耳に血が塗られたことを指し示していると考えられます。つまりこの出来事は、時の大祭司であったカヤパの正当性を示すものであったと考えられます。しかし大祭司の聖別には他にも雄牛や雄羊、パン等のいけにえや捧げものがが必要です。それに取って代わられるのが十字架にか

かられるイエシュアです。イエシュアの十字架によって流される血、そして死は単に人の罪の身代わりというものではなく、律法に定められたすべてのいけにえ、捧げものによる贖いを集約した完全な捧げものによる贖いであり、一度限りの「永遠の贖い」です。

【新改訳改訂第3版】

ヘブル

9:11 しかしキリストは、すでに成就したすばらしい事からの大祭司として来られ、手で造った物でない、言い替えば、この造られた物とは違った、さらに偉大な、さらに完全な幕屋を通り、

9:12 また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所に入り、**永遠の贖い**を成し遂げられたのです。

律法によれば、罪が赦されるための贖いにはすべて、いけにえと、そしてそれを捧げる大祭司の存在が絶対に必要不可欠なのです。ですからイエシュアは、ご自分が十字架の死によって贖いが成される際の大祭司として、後述する時の大祭司カヤパを正当な大祭司であるとされ、そのための行為が、この右の耳（耳たぶ）を切られた大祭司のしもべマルコスの出来事であったと考えられます。

### 3. マルコス

18:11 そこで、イエスはペテロに言われた。「剣をさやに収めなさい。父がわたしに下さった杯を、どうして飲まずにいられよう。」

イエシュアはシモン・ペテロがマルコスを殺すことはお許しになりませんでした。それどころカルカの福音書にはイエシュアが傷ついたマルコスの耳を治したとさえ記されています（ルカ 22:51）。イエシュアはご自分が十字架にかかることを「父が下さった杯」と言われましたが、それは一体どんな「杯」だったのでしょか。ここで今一度大祭司のしもべ、マルコスに注目したいと思います。実はこの出来事についてマタイ、マルコ、ルカ、そしてヨハネのすべての福音書が記しているにもかかわらず、マルコスという実名を記しているのはこのヨハネの福音書だけなのです。ヨハネがあえてマルコスという実名を記した意図を、ヘブル語で考えてみるならば、マルコス(מַרְכּוֹס)はこのように表記され、そこにはメレク(מֶלֶךְ)、そしてコース(כּוֹס)という二つの言葉を見つけることができます。メレクは「王」そしてコースはなんと「杯」という意味があるのです。つまりマルコスとは「王の杯」という意味があるのです。ですから「父が下さった杯」とは「王の杯」、王が飲むべき王専用の杯だということだと考えられます。イエシュアは罪人として十字架にかかられるのではなく、イスラエルの「王」として十字架にかかられることが、このマルコスという名に表されたメッセージであると考えられます。



### 4. アンナス

18:12 そこで、一隊の兵士と千人隊長、それにユダヤ人から送られた役人たちは、イエスを捕らえて縛り、  
18:13 まずアンナスのところへ連れて行った。彼がその年の大祭司カヤパのしゅうとだったからである。

アンナスとは、およそ A.D.7~14 年頃に在職していたとされる大祭司です。大祭司職は本来終身制でしたが、当時ユダヤを支配していたローマ帝国は、一人の指導者に権力が集中することを嫌い、時折大祭司を交代させていたようです。カヤパが「その年の大祭司」と記されているのはそのためです。このような大祭司制度は完全に律法からかけ離れたものでしたので、カヤパに大祭司



としての正当性を与えるために、先ほどの大祭司の（しもべの）右の耳を切るという出来事が必要であったと考えられます。この年の大祭司は確かにカヤパでしたが、ユダヤ人たちはアンナスもまた大祭司と認めていました。実際にアンナスは現職のカヤパのしゅうとということもありましたがこの当時、神殿の管理運営はアンナスとその 5 人の息子たちが独占していました。当時、神殿の庭には両替をしたり、いけにえ用の動物を売ったりする場所がありましたが、ユダヤ人の指導者たちはそこを「アンナスの息子たちのバザール」と呼んでいたそうです。つまりアンナスは当時の神殿でささげるいけにえの責任者でした。その彼のもとに真っ先にイエシュアが連れて来られたということは、イエシュアが罪人としてではなく、贖いのいけにえとして捕らえられたということが示されていると考えられます。

18:14 カヤパは、ひとりの人が民に代わって死ぬことが得策である、とユダヤ人に助言した人である。

このカヤパの助言がきっかけとなり、イエシュアは十字架にかけられることになるのです。このように、イエシュアの十字架の死による贖いが大祭司の指示によるもの、すなわち正当なもの、律法に則したものであることが示されていると考えられます。

## 5. 成就

18:15 シモン・ペテロともうひとりの弟子は、イエスについて行った。この弟子は大祭司の知り合いで、イエスといっしょに大祭司の中庭に入った。

少し紛らわしいことですが、ここに記されている大祭司はその年の大祭司カヤパのことではなく、そのしゅうとであったアンナスのことです。先に述べたように、元大祭司であったアンナスは、退職しても神殿の管理運営を独占していましたので、ユダヤ人たちから大祭司として認知されていました。つまりカヤパも大祭司だが、アンナスもまた大祭司というわけです。律法によれば本来大祭司は一人です。このように、当時律法に定められた大祭司制度が完全に破たんしていたことが解ります。というわけで、イエシュアは捕えられ、アンナスのもとに連れて行かれました。そこにシモン・ペテロともう一人、アンナスの知り合いだという弟子がついて行きます。

18:16 しかし、ペテロは外で門のところ立っていた。それで、大祭司の知り合いである、もうひとりの弟子が出て来て、門番の女に話して、ペテロを連れて入った。

18:17 すると、門番のはしめがペテロに、「あなたもあの人の弟子ではないでしょうね」と言った。ペテロは、「そんな者ではない」と言った。

ほんのついさっき、イエシュアを守るためにローマの兵士たちを前にしても剣を抜いたペテロが、門番の女性の前にあっさりイエシュアとの関係を否定しました。この変わりっぷりは異常です。しかも門番の女性は「あ

なたも…弟子ではないでしょうね」と問うています。つまりいっしょについて来たもう一人の弟子は、自分がイエシュアの弟子であることを告げたということです。にもかかわらずペテロはそれを否定しました。彼がどのような心境で否定したのかははっきりとはわかりませんが、先ほどの剣を抜いたあの事件が、彼に大きな影響を与えたことは確かです。そして何より

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

13:38 まことに、まことに、あなたに告げます。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います。」

とペテロに対して語られたイエシュアの御言葉が成就し始めたのです。イエシュアの御言葉は神様の御言葉です。幸いであれ、災いであれ、語られたことはすべて成就するのです。

18:18 寒かったので、しもべたちや役人たちは、炭火をおこし、そこに立って暖まっていた。ペテロも彼らといっしょに、立って暖まっていた。

この「しもべたちや役人たち」とは、おそらく先ほどイスカリオテ・ユダに率いられてローマ兵たちとともにイエシュアを捕えに行った者たちです。そんな彼らといっしょにペテロが炭火で暖まっています。もう一人の弟子はイエシュアについて行き、知り合いであるアンナスのところまでいっしょに行ったのでしょうか。しかし弟子であることを否定したペテロは、もはや敵と味方の区別もつかないほど混乱してしまっていたのでしょうか。しもべたちや役人たちと「いっしょに、立って」というペテロの行為は、言葉だけでなく態度においてもイエシュアとの関係を否定し、そしてイエシュアを信じない者たちと繋がろうとしていることが解ります。

## 6. 尋問

18:19 そこで、大祭司はイエスに、弟子たちのこと、また、教えのことについて尋問した。

ここに記されている大祭司も現職のカヤパのことではなく、元大祭司のアンナスのことです。

18:20 イエスは彼に答えられた。「わたしは世に向かって公然と話しました。わたしはユダヤ人がみな集まって来る会堂や宮で、いつも教えたのです。隠れて話したことは何もありません。

イエシュアは「ユダヤ人がみな集まって来る会堂や宮で、いつも教えたのです。」神殿の責任者であるアンナスが、それを聞いていないはずがありません。しかし彼はそれを聞いても受け入れなかった、信じなかったのです。聞く気がないのに、受け入れる気がないのになぜもう一度聞こうとするのかと逆にイエシュアがアンナスに問いかけます。

18:21 なぜ、あなたはわたしに尋ねるのですか。わたしが人々に何を話したかは、わたしから聞いた人たちに尋ねなさい。彼らならわたしが話した事がらを知っています。」

わたしから聞く気がないのなら、わたしのことが気に入らないのなら「わたしから聞いた人たち」に聞いたらどうだ、とイエシュアは言っておられるようです。これは少し皮肉めいた言い方です。

このように、アンナスの尋問に対してイエシュアは何もお答えになりませんでした。なぜならイエシュアは御父である神様から遣わされた御方です。たとえ誰に尋問され、誰に強要されようとも、人の指図によって何かを語ることはおろか、ご自分の意志からでさえ何も語られません。ただ御父が語れと言われることだけを語られるのです。以前にも度々イエシュアはこのように語っておられました。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

12:49 わたしは、自分から話したのではありません。わたしを遣わした父ご自身が、わたしが何を言い、何を話すべきかをお命じになりました。

これがこのヨハネの福音書が一貫して主張しているイエシュア像、御父から遣わされた御子としての在り方、姿勢です。ですからここでもイエシュアが何かを語ったり教えたりするなら、それは御父ではなく尋問しているアンナスに従うこととなります。イエシュアは御父以外、誰にも従いません。そのような理由からイエシュアはアンナスに尋問されたことについては、何もお答えにならなかったのだと考えられます。

18:22 イエスがこう言われたとき、そばに立っていた役人のひとりが、「大祭司にそのような答え方をするのか」と言って、平手でイエスを打った。

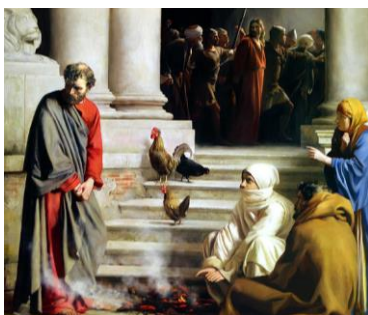


18:23 イエスは彼に答えられた。「もしわたしの言ったことが悪いなら、その悪い証拠を示しなさい。しかし、もし正しいなら、なぜ、わたしを打つのか。」

18:24 アンナスはイエスを、縛ったままで大祭司カヤパのところに送った。

「もし正しいなら、なぜ、わたしを打つのか。」イエシュアのこの問いに対し、アンナスは何も答えることができませんでした。つまりイエシュアの正しさを認めたこととなります。しかしそれを言葉で否定することができず、(しもべの)平手打ちで否定したのです。

## 7. 神様の選び



18:25 一方、シモン・ペテロは立って、暖まっていた。すると、人々は彼に言った。「あなたもあの人の弟子ではないでしょうね。」ペテロは否定して、「そんな者ではない」と言った。

18:26 大祭司のしもべのひとりで、ペテロに耳を切り落とされた人の親類に当たる者が言った。「私が見なかったとでもいうのですか。あなたは園であの人といっしょにいました。」

18:27 それで、ペテロはもう一度否定した。するとすぐ鶏が鳴いた。

果たしてイエシュアの宣言通りに、シモン・ペテロは鶏が鳴くまでに三度もイエシュアとの関係を、自分が



弟子であることを否定しました。彼が「三度」否定したその理由として考えられるのは、「三度」とはイスラエルの祭り、礼拝、または祈りを指し示すものであるということです。

【新改訳改訂第3版】

出エジプト

23:14 年に三度、わたしのために祭りを行わなければならない。

23:17 年に三度、男子はみな、あなたの主、【主】の前に出なければならない。

ダニエル

6:10 …彼の屋上の部屋の窓はエルサレムに向かってあいていた。——彼は、いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた。

祭りや祈りとはすなわち神様の御前に出ること、神様と交わることです。つまりペテロは人に向かって弟子ではない「そんな者ではない」と言っただけでなく、神様、イエシュアとの交わりを否定した、断ち切ったことを意味すると考えられます。

しかしその時のペテロの描写、説明が、他の福音書に比べて実にシンプルかつ単的にまとめられていて、あまり大きく取り扱っていません。大事な場面であるにもかかわらず、細かい描写が特徴のヨハネの福音書としては、この書き方は少々腑に落ちません。しかしその理由は、これらの出来事の前に、ヨハネ 17 章全体に記されたイエシュアの執り成しの祈りがあったことが関係していると思われます。あの祈りがペテロの「そんな者ではない」という一言によって打ち消されてしまうようなことがあるでしょうか。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

17:24 父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったものをわたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。

このような神様のご計画、そしてこのイエシュアの執り成しの祈りの前に、人の否定、恐れあまり思わずついでしまった嘘など、まったく取るに足りないものなのだということです。神様はご自分の計画を一つも違わずすべて成し遂げられます。ご自分がお選びになった者を、神様は絶対にご自分のものになさいます。たとえそれがこのシモン・ペテロのように、選ばれた者自身が「そんな者ではない」と言ってそれを否定しようともです。「鶏が鳴くまでに三度わたしを知らないと言います。」と言われたイエシュアの短い言葉が、まったくその通りに実現したならば、ヨハネの福音書 17 章全体に綴られたイエシュアの祈りがまったくその通りに実現しないはずがありません。神様のご計画は、ただ神様の御意志によるものです。人の気持ち一つで揺さぶられるような、そんな小さなものではありません。たとえ全世界が否定したとしても、神様があなたをご自分のものにしようと選んでおられるなら、それは必ずそのようになるのです。

【新改訳改訂第3版】

エペソ

1:5 神は、みむねとみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。

1:6 それは、神がその愛する方であって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。

あなたは神様に選ばれています。それはあなたの意志によるものではありません。ただ神様の「みむねとみこころ」によるのです。受け取りましょう。信じましょう。たとえ誰が否定しようとも、あなた自身が「そんな者ではない」と否定しようとも、あなたは神様に選ばれているのです。